洋学文庫
文庫8
C 310
5

西洋雜記巻之五

夢遊漫筆 第二十五

小東洋 夢遊道人筆録

風鳥の説

俗にいふ風鳥ハ南懐仁が坤輿外記に無對鳥と作る和蘭語にてハ「パラデイス.ホヲゲル」といふ西書所載乃説磐水先生乃蘭畹摘芳中にてみ譯文ありといへとも今まゝ「ボイス」乃書に所載の説を得たるにこれを記す「ホイス」が所撰の学藝全書にいはく「パラデイ

LINDTO.

ス・ホオコル」和蘭語「ホヲゴル」イ鳥なり「ヒブ子ルス」及び「ラヲイツ」の書みを「パラデ井ス」を此鳥昔しを「トルコ」の屬「パラディス」の地より產ずと思ひて如是の名號命すとまゝ「ハレンテイン」の書ろを「パラディス」を太虛なり此鳥太虛の中を飛翔して地み下るなきにようて名くとられ等の書蕃晩摘芳中み詳之 一名「マニユコ・テアリ」又名「アヒユス。
パラテヒアカ」なる者是一種乃奇鳥みして其羽
毛華彩眼に叙采爛たる者なり此鳥その羽毛
翅翼雖見るのかうち他鳥と是甚異なりい
りんとなれどその胸よりして甚長き羽を生え
して尾よりも長くして且廣きが故なり此鳥
大抵すべて其尾骶乃所よりして二條乃長き

系乃如くなる毛を生しその色黒く羽とい異
にして且全身乃羽よりも甚く長し眼ハ甚
頭諸部に比すれバ甚小く嘴を細く旋ろし
恰も鶺鴒乃嘴に似あり窮理乃諸学家お
よび諸の此鳥を產する乃地方ヱ旅行せし人乃
說にこな此島ヱ數種ゐあとしえを「ライ」とい
人の說に是これ鷙鳥乃一ッ種にして其小なる
者あるとしくを此鳥の多世に所傳誤說數
條あり或いハいそく此鳥是たゞ氣物服するのと

みしてつねに飲食する事なく又その足なく空
中に飛翔して終に地に下る事なし故に其
屍を年老ひまたは病みて自然に死して地に落
る者が拾ひ得るのみなりとまた或はいはく此
鳥に喙曲りて甚だ尖利なる爪あるが故に鳩大
の諸の小鳥が追てこれが捕へ攫裂さるゝ是
が食ふのみなりと猶他の鷙鳥に異ならずと然
れども此等をつねに妄誕なれば信ずべからず況
此鳥は高樹の上よりして飛翔するやその軽

捷なること恰も燕に同じ故に印度の大は此鳥を名
け呼て「テルナアテ」燕といふこれは「テルナアテ」の
地に多く此鳥を産するが故なりまた「ヘルヒジウス」
といふ人の説にも此鳥はこれ印度地方の最南諸
地にのみいほといふ（「テルナアテ」は小馬路古五島の一なり）「キユリユシウス」といふ
人の説には此鳥が定めて大小の二種とす其大なる
る者は「アルウ」の諸島にあるをのみにして色彩
最美麗に尾羽よりしての長毛ゆりまた其小なる
る者を巴布亜(パプア)私(ス)・雑為(ノラハゴ)遙亜(イチア)等の諸地に産する者

にして大なる者に比すれバ叢聚ならず且尾鬣の長
毛なく羽毛の色白くして且黄を帯ふといふなれども
此大小二種の鳥共に其中に鳥共に其中に鳥王なるも
の如き其形他の鳥よりハ小にして其飛ぶ事ハ
最高きを以てこれが区別を其羽毛最光彩ある
もその尾の小なる所よりしてまつ一の長き羽が
生を他の鳥となる此鳥王に従ひて集るの附といへ
ども亦これを以て識別志しその上ますく馬尾の
如くなる毛ある末乃所より一束となるなつまり

て旋廻し最末にいたりてハ毛彩ある羽のごとく
になるなり
此鳥欧羅巴(エウロツパ)洲地方の好事家甚これが貴重す
馬路古(モリユツク)地方に於てハ此鳥が呼て「マニユコヂア
タ」といふ「アルトロハンチユス」といふ人の説にいはく
これハ神鳥といへる義なりと志かれどもその神鳥
と名づけたる所以を則ちいまだ詳ならず凡そ此鳥
その大なる者ハ身の大きさ大抵鳩の如くにして
其翅を赤色なり「ヘルヒビウス」といふ人の説に曰く

此鳥を産する彼炎熱なる地方恒に陰雨多き所
候にいたれば九箇月の間も此鳥の羽色脱落する
事多し而して欧羅巴の八月の候にいたれは則
ちその雛を生育も此時より解て羽色再び生し而
して其鳥王なる者に来りて集ることと猶我
が欧羅巴の「スプレエウウエニ」といへる鳥に似たり此
鳥恒に止宿なす処を揺動せしめざる高大なる
樹上なり日夕にいたれば諸鳥相率て一処に行き
また其鳥王の側を避け次第を逐てこれを

宿す其食する所のものは一種の甚高くし
て枝多き大樹に生ずる所の赤色なる小草實な
を人その恒に止宿する所の樹を認てその枝上に
小さき鳥巣を構へ多くの小孔ある外面に穿ちて
以そかに其中に隠れ居て其鳥の樹上にいたつま
り止宿するを待ちてこれに近つき芦管にて造
る所の小箭ありてこれを射殺す若し其鳥王を
射落したときは諸鳥これを見て散て動き飛ぶ
人に射られるに任せて悉く地上に落此に於て此鳥

の腹を割き開き一箇の鉄器を焼きこれを腹中か
刺いれてその臓腑および肉等を除き去りこれを
烟窓の上に懸け乾かして而後に商賈の従者多く
これを號して「ビユラシグ・ハアリユラ」といふ而して
波尔杜瓦尔國の人は此鳥を名けて日鳥といふと
なり
巴布亜私島の土人も此鳥の黒色ある者を捕へ
獲て其足および翅を截去りてこれを擴げ其羽
を束ね集めて装飾して其所用の巾の頂にこれ

を戴くなり此種の鳥も其羽美なる黒色あり
て且紫色透明し其間に金色ありて甚光彩
ある毛の雜されり其尾翮も太く青緑赤等諸
色をまじへて甚光澤なり
凡此鳥の羽毛の色種々甚多し故に諸家の図畫
する所其形色殊別にして一ならずいま詳かにこ
れをあはせ考ふるに其頭の毛美麗にして種々なり
或は頭の色諸種相まじはれるもあり而して
其大なる者もその色最美にして透明光沢あり

其頭色總て赤きを乃ち稍緋なるといふ其他を
青色緑色黒色黄色金色梅子色等種々なる大
抵其頭及ひ頷の上面を黄にして其咽頭を緑
色其背及翅を赤を帯て赫栗色に其羽長くし
てこれを捲ふ此羽乃長くさしおこるの尖末を灰
白色と白色黄色赤色等を帯ひ此諸色の羽聚り
て一束をなして色もまた諸種混合もゆへに
美観とを成なり
此鳥その雌雄を分かつるの法も他なし　を純

なる者をその喙と尾脚よりも生ずるの長毛々
に赤色なるこれ故以て識るのみなり

「カナアリヤ」鳥の説

「ビブ子ルス」の萬國傳信記事にいはく「カナアリイ・
ホウクル」「カナアリヤ」を「アブリカ」西海中に在て其島大小七あり「カナアリヤ」を總名なり一名「ゲリユツキク・エイラ
ンデン」といふ漢に福嶋といふ是なり　一名「セリニ・デ・カナアリイ」とも「イスパニア」國の王に属す
といふ此鳥その始めて「カナアリヤ」島より產ぜし故
に如此に名く其形「チスステル・ヒンキ」に甚相似たり「チスステル」
・ヒンキ」も一種の小鳥なりその羽色美にして色種々なり囀声美なる
巣を高樹の上に作る「チステル」を鶸なり此鳥好むで赤き鶸地

食ふ虫に 其腹を多くを黄にしてまゝ灰白色をな
し又此鳥其色白きを乃およひ尚その外種ゝ乃
色をなすものゝ羽毛綺麗にして囀声美なるも
乃声佳ならざる者をも笛等の楽器をよく法を
以てこれに示しきかしめて遂によく其声を佳にす
べしいまは此鳥入尓瑪尼亜并和蘭国その他欧羅
巴洲中乃諸国にこれを多くこれを産ずれども此鳥の雌
なるもの稀にして「デステル・ヒンキ」上に見ゆ と交りて雛を生
するその第三等目に産せる雛を其頭を「デステ

ルヒンキ」の如くにして躰を「カナアリヤ」鳥の如
しまうれども其囀声をいしきなし 凡そ此
鳥雛を生んとするの候にいたりて蟻の卵を餌
ふれよしとぞ 又或は麻の実の粒を食せしむ 又
此鳥病ありて頭に腫物を生ずるありとれば雌雄の
脂をもて塗るべし たとへ其腫物熟して潰瘍をなすとも
又彼脂を甚だしく久しく塗りて遂によくこれを
治すべし 又或は此鳥の羽毛に虫生ずるには胡椒の
乳乃種をこれに加へ毎日二三度ばかり酒を以て

その羽毛をしめしひらげて日光のかゝる所にかゝく
麗しおよそ此鳥の雄なる者もその雌ある者に比
すれば身躰細長にして尾長く囀声最美し

墨是可國大鴉の説

北亜墨利加(ノルドアメリカ)洲墨是可(メキシコ)の地に一種の大鴉を産す
これを名づけて「アララ」または「ガツリナスタ」といふ
其大きさ恰も鷲の如し土人これを「トロビル
チ」と名づく此鴉色黒く其喙も頗る鸚鵡に
似たり新伊斯把你亜(ノウハイスパニア)國中に於てハ恒に見る所
なれ多く其巣を大樹かあるひは岩石の間に造
るその雛生れて始めは白く長ずるにしたがひて黒
色に変ず其飛ぶこと甚高しその心臓を採りて
日に乾かすときは其香気甚強し其肉をよく痘
瘡に用ひて甚効ありといふ

印度國小鳥の説

印度の地に一種の小鳥を産すこれを「キユアインムビ」
と名づく波尓杜瓦尓(ポルトガル)國の人を呼で「ペカフロル」と
いふ其羽毛甚美麗にて全体の大きさ僅に蝗の如

く頭の大きさは櫻子の如し嘴は黒くして
長く尖りて直にその細き線の如し足も全体
に比すれば甚小にして色黒く尾も長く直にして
僅に三四羽なれば此鳥羽毛甚滑沢光彩ありて日に
映ずる時もその美麗なることまことに常に優す印
度の人此鳥を佛像の前に蓄ひてこれに餌ふ
に諸花を以てす相つたふ此鳥性きはめて花を
好むて其地方花少なきの候にいたれば嘴を以て
樹幹を穿て孔を作りてその中に入りて隠れ蟄

して動かず居る事半年の繁花盛なるの候を待
て則ち出ると云ふ

南亜墨利加の大鳥の説

南亜墨利加(アメリカ)洲孛露(ヘリユウ)等の國一種の奇異なる
大鳥を産す名けて「マンドル」と云ふ此鳥身軀きハ
めて大にしてよく羊羔を攫て高飛すその翅
を開くときは一方の翅の端より一方の翅端まで
長さ凡そ五「エルレン」及一「エルレン」四分の三にいたる者
あり 一「エルレン」も此方の曲尺一寸四分余なり五「エルレン」及一「エルレン」四分の三まで大抵此方の一丈二三尺にいたる心し 甚

是に氿なし故に是等より人物に害をなすことを
なくまたされとも嘴は甚尖利にしてよく牛皮
等を透す曾て一羊を此鳥二隻空より飛下りて左右
より羊皮を剌透してこれを斃せしことありまた
或は小児を刺殺して攫去りしことも有りこの鳥其
羽は畧白斑又は黒くなして頗美なり頭に冠の如き鬣鬚
色はなし稍紫にむらいて垂るゝの形を頗る吐綬雞
に類して其色赤し孛露（リユウベ）等の人神を祭る時に
は此鳥の羽等を供して以て福をいのるといふ

地生羊の説

韃而靼（ダルタリア）部中「サメタ」等の地に一種の奇物を産す
これを「ラテン」語に「アダニユス・シケイチキユム」（「ラテン語「アグニユ）ス」は羊なり「シケイチキユム」は韃人の北方の西名（漢に是的亜と譯すその是なり）「アグニユスヘゲタビリス」と
いへり（「ラテン」語にて「ヘゲタビリス」は木草をいふ）和蘭語にては「フリユクト・デ
イル」（和蘭語「フリユクト」は菓なり「テイル」は生気をいふ）または「タツタリセ・ラム」（韃靼羊ノ義）
または「シケイチセラ・ム」（是的亜羊の義）といふ韃靼の人は名
付て「ボラメ井ス」といふこれを乃地の土人一種の西
瓜に似て西瓜に似て西瓜より生をなし纔き種子

越藕なりすなはち一の單茎より生し其茎高さ
三尺許にいたれば一の羊の如くなる形の物その茎
に纏ひ生して其臍を茎と相連り其頭及耳爪
足等皆そなはりまたその頭の角を生ずべき所
には一束の毛叢生して稍高く恰も角を備へ
たるに似たり其物熟するに及びて茎を次第に
枯槁して身皮毛より生じ肉にはあらず則ち薄き白膜より
り其毛柔にして巻曲変生しその近傍四面に
所生の他の諸草を日を追て悉く萎み腐る蓋し

此羊の食ふ所なるに似たりといへるとなれば人若し
近傍の草を刈るときは此羊則ち枯るが由へなり且
これを切れば赤き液汁流れでおぼ恰も血の如
しその内の肉もその味蝦或は蟹の肉の如く
且甚其美なり韃靼の人此羊の皮を採り巾となし
して頭より色々その他衣服器用珍好の物となす
またいはく此羊熟するのころに及んで狼等の
獣来てこれを喰まんとを欲す故に土人心より用
ひて諸の野獣を防ぐことと甚密なりといふ

而してその皮が我が歐羅巴洲中にまゝ輸きたれし貨物なることも先哲までにも多くこれが明白にせるいかんとなれバこの東方印度邊より所の大羊の胎肉よりなる羔の皮が剝取りて偽造せし所の者なるはなり其草茎より生ずる所の羊皮の真物の如きは歐羅巴洲に於てこれが見ること稀なり

右は「トヽ子ラス」が本草からび「ウヲイツ」が醫學塾に所載の説にしてその所言本草

綱目が所言の地生羊と大抵相同じ故に今下よ本草綱目及史記註所載の説を録して以て考證にそなふるのみ

本草綱目羊部附録に曰地生羊出西域劉郁出使西域記以羊臍種于土中漑以水聞雷而生臍之與地連及長驚以木声臍乃斷便能行囓草至秋可食臍内復有種名壟種羊段公路北戸録云大秦國有地生羊其羔生土中國人築牆圍之臍與地連割之則死

但ニ走馬撃鼓以駭之驚鳴臍絶便逐水草呉
菜淵類集云西域地生羊以脛骨種土中聞
雷声則羊子従骨中生走馬驚之則臍絶
也其皮可為褥一云漠北人種羊角而生大
如兎而肥美三説稍異未知果種何物也當
以劉説為是然亦神矣造化之妙微哉

又史記大宛傳の註に采庸か異物志を引て曰
大秦之北附庸小邑有羊羔自然生於土中候其
欲萌築墻遶之恐獣所食其臍與地連割絶則
死撃物驚之乃驚鳴臍遂絶則逐水草為群

海牛の説

亜墨利加の海中に一種の獣を産す名けて「マナチ」
といふ和蘭の人是を「セエ・クウ」といふ（海牛といへる義なり）
これ則ち一種の身幹不具の獣なるを此前の二
足をそれを用ゆ類の如くにて頗る牛に髣に全身
赭色その頭顱も野羊に似て口も犢牛に類す
眼小に鼻孔大ふして耳なし尾も短くして圓
し体の大きさ牛の如し其大なる者も一丈五六尺

經七八尺に至るもあり恒に海中に生ずる所の草を
食ふ其頭中に石ありて色白くして鈍圓なり此
象骨に彩ある香氣及味なし主治ハ諸痛を
止るに用ゆ腎及び腰痛・拘攣・癀疝瘕瘕等に
用ひて効あり又外傳の藥にも用ゆといふ

「アチムナイム」獸の説

亜弗利加(アフリカ)洲中利未亜(リビア)・奴米弟亜(ヌミデア)等の地に於て其
人多く「アヂムナイム」といへる獸を畜ふ其の
大きさハ犢牛の如く形ハ羊に似たり耳長くし
て後に垂る毛ハ短くして甚柔に乳汁甚多し
身に力ありてよく人を負ひて行くに足る此獸他と
異なる者ハ牝なる者にのミ角ありて牡にハ却
て角なしといふ

亜墨利加の異猿の説

南亜墨利加(ソイデアメリカ)洲伯西児(ブラシリア)「マラクヴナこ」等の地に一種
の猿猴を産す名あり「カヨウ」といふ全身毛甚多
く灰白なる長き鬚ありて眼黒く耳毛に尾ハ
甚長くその面貌恰も老人に肖たりといふ

「ドヽアルス」鳥の説

印第亜乃属島「マウリシウス」の地に一種の大鳥を産す名けて「トヽ」また「トヽアトルス」と云ふ蓋し「ストロイスホヲコル」駝鳥の種類なり或ハ以て天鵞の種とすその頭ミ膜皮ありて是を掩ふこと「モンニキ」僧官の名の所戴の巾に似たり故又号して「モンニキ・スワアン」と云ふ「スワアンも大鵞なり」其形状やゝ駝鳥に似てまた吐綬雞に類す此鳥肉甚多くして二隻乃肉を以てよく百餘人の食に供するに足る其味もまた甚美なり

白孔雀白雞白猪白熊乃説

北方沍寒の諸地方殊に欧羅巴(ヱウロッパ)洲諾尔勿入亜(ノルウヱジア)国の地に於て一種乃白き孔雀を産す羽毛うるはしく縞羅ミ其雌なるその雪堆き山中に於て卵を中に蔵てよくこれを生育す又一種乃白雞あり名けて「スネエウ・ウーン」と云ふ雪雞の義其大きさ鳩の如く性また雪をこのむまた莫斯哥未亜(ムスコビア)および「エイスランド」に白猪白熊を産しまた以児狼徳(ヅルウンランド)の海

中に一種の稍白色なる鯨を産すこれを「ラキッテ。ヒッス」(白魚の義)と名く蓋し北方の塞地に如く白き生類を生ずる南方黒人国の人はいふにおよばず雛もまた黒きと相反せり

印度の異木の説

南方印度(インド)の地に一種の異木を産す其樹枝東にむかふものは食薬にして諸般の病患に用ひてきはめて効あり西にむかふものは大毒ありて誤りて服するときは人を殺す其理得て詳に

することなしといふ

鐵島水樹の説

亜弗利加(アフリカ)洲皮力土尓熱利土(ヒレドルケリド)の国西の海中に十餘島あり總称して「カナアリヤ」といふこれ伊斯把(イスパ)你亜(ニア)国王に属すその最西にある一島を「ヘルマ」と名くまた「エイセル・エイランド」と名く共に鉄島といへる義なり此島に一種の奇樹を産ず和蘭の人呼て「ワアトル・ホオム」といふ(水樹の義)其枝葉恒に清水ありて滴りてあり日光照らされどもその水滴ること最甚し故

に土人これが桶鉢乃類を多く樹下におきてその水を
受此島中絶て水泉なしといへども此水を日用に
供して少しも事を缺くることなしといふ造化の
功妙なる哉故に称して聖水といふこれ一千四百零二
年（日本應永五年 明建文四年）払郎察国「ノルマンデイ」の人「ベテンコウルト」なる者島に至りて此水の奇状を見てそ乃
所著の書に記録してより諸の西書この水の事を
載（ノス）る者甚多し「ドヽ子ウス」がいはくこれ猶我欧羅巴（エウロッパ）
洲所産の「リングラー」草（日露の義）の日中にいへれをたる

滴下して地を湿ほす如きもの乃気志うれども我いま
だ彼嶌にいたりて此奇樹を見ることを得ず由ゑに
此理を詳に窮むることを得ずと記せり

大懶毒辣（タラントラ）の説

意太利亜（イタリア）国に属する那波里（ナポリ）国の内「タレント」の地及び
其近傍西齊里亜哥尔西加等の諸島に一種の毒虫
を産すこれを名づけて大懶辣といひ又「ステルリオ子
ス」といふ和蘭乃人を呼て「トルレ・スピンネ・コツプ」といふ（狂蜘蛛といへる義なり）乃ち蜘蛛の類なり人をしてこれに螫れ

てその毒みなぎれば則ち狂するが如し或は舞ひ或は歌ひ或ひは怒り或は笑ふ故に此病を名けて「ラテン」の語に「タランテスミユス」といひ和蘭の語に「ダンス・シサイテ」といふ（「ダンス」は舞踏なり「シイキテ」は病なり）これを療するにもその病人を轎子の如きものゝ中にいれて四隅に綱をつけて高処に懸けてこれを推廻しそれが其轎子旋転してやまず此時におい て其傍にありて其病人の平生好む所の楽器を奏すれば病人則ち醒て平癒す而後に薬を以てこれを治すといふ

「アダムス・アップル」の説

和蘭語に佛手柑を謂て「シツトシラン」といふ其一種大なる者を「アダムス・アップル」といふ其状橙橘の類と同しくしてたゞ橙子よりも大なること二三倍外面にすこしの断紋(キレタ)ありて恰も人の歯を以て咬みたる状に同しこれ太古の世に世界開闢あるときに人の始祖亜當(アダム)此菓三枚を取てこれを喰ひ嚙みしといふ故名づく「アダムス・アップル」

」といふ此島人に「ヨオデン」の人（上古の如徳亜人の子孫之上乃才三巻に見ゆ）ましな家ことに毎年此菓一枚を採てその神に供ふ故にまた此菓を世に称して「ヨオデン・アップル」といふ

象 并 象牙の説

「ヒブ子ルス」が万国伝信記事にいはく　象を西語「オリハント」又「エレハス」といふこれ四足生類の中に於て最も大なり且一猛にして又霊慧にしてよく人に馴てその役使せる所にしたがふ其天性野猪

龍嵐および燕などを悪む（故に謝在杭の五雑俎にいはく象畏嵐）　印度及び亜弗利加（アフリカ）洲の人は此獣を以て戦の用ひ且其上に騎る事をなす此獣二ツの長牙ありて口より生して外に向ひて出たる是則ち世によく知れるところの「エルペンベエン」これなり又其鼻甚長し是故名けて「プロボスシス」といふ此鼻を以て人の手などはたらくが如くに諸般の事に用ゆ此獣多く亜細（アジ）亜洲中に産して殊に多く亜弗利加（アフリカ）洲の亜毘心城（アビシニエイ）・莫年莫太巴（モノモタパ）「王又エモキイ」等の諸王

國乃地及セ則意蘭(セイラン)島よりも按するに輿地圖說に「セイラン」の象もよく人語を解し重き物荷く遠きにいたすといふまた其最大なる者を工鄂國より產す此國より生ずる所の象その牙二百餘斤に至ることも上巻に見ゆおよそ象ハ其壽よく一百五十歳を保つといふ

「ラヲイツ」が醫学寶函にいはく象ハ大獸にして東方印度および黒地兀皮亜(エジヲピア)「アフリカ洲黒人諸國諸國の惣名」の地に產し人其牙を藥用に供せるが爲に生藥舗よりこれを求むこれを名づけて「ラテン語に「エビユル」といひ和蘭語に「エイホヲル」といふ此牙

甚大にして其經および圍もまたこれにかなふ其外面黄にして裡面を白し其獸の大小に從ひて此牙の大小輕重差あるゆゑに其重さ五六十「ホンド」よりして或は百餘「ポント」にいたる者あり「ポンド」を量の名藥用の「ポンド」ハ一「ポンド」の重さ九十六匁弱なり詳に下巻に見而して其牙の状全きものは彼所產の地方より我が歐羅巴に輸し來る者是を名づけて「エビユルインレテグリム」また「インフラタ」といふ醫家に於て藥となして是を用ゆこまは「ラテン」語に「ラレユラ・エボリス」といひ和

蘭語に「ケラスプト・エイホラル」といふ（是ハ擦象牙といふ義）此
屑よく諸種の熱病黄疸およひ肝脾二臟の閉塞
なるに用て功あり其外尚是を更に焼て用ゆる
者あり是を名けて「エビユル・ラストム」といふ今の
品また二種を分ば其一を火氣を外に洩して久し
く焼き白色をなす者なりこれを「スポラウ
ム・エキス・エホヒ」と名く其内外面共ニ白くして量
重く質柔脆ニして美なし紀[?]鮮節をなす
此物よく閉塞を除の功ありまくある也[?]

を製して錠となすおよひ痢病ニ用ゆ
妙なりまたよく白帯下を治すその一を象牙
壺中に固封して焼たる者ニして甚色甚
黒し世ニ又或を象牙ニ似たる乃大牙を土
中より堀して採得ることあり甚物また外面ハ黄
ニして裏面を白しこれを舌上にかけばよく
舌に粘着す蓋し此土中より得る所の象牙に
似よりの者を豈象牙の久しく土中ニ埋まれて
土氣薫蒸[?]してかくの如くに軟なるに至るもの

を成せ音脈ある土気自然に凝成して牙の如く
なる形状を結ぶものなりといふ然れども窮理の
学家に就て此「エヒユル・ホツシレ」（則ち掘をいだすの義なりといふなり）
は定めて「ウニコウルニユ・ホツシン」と其功用は同じ
（ふきとくには「ウニコオルニユ・ホツシレ」を掘をいだす一角といふものにてまく土中より出る者なり詳）
（不醫学宝函にも出蓋し此方にいふ龍骨の類ならん）

「オポシユム」獣「セミヒユルパ」獣の説

亜墨利加洲加里巴納諸島の地に一種の獣を産し
名けて「オポツシユム」といふ其大きさ猫の如く喙
を尖して下齶を上齶よりも短く喙の股を
捨も豕に類す其爪きわめて尖利にして樹木
に爬ひ上ること極めて速かにしてよく鳥を捕へて
是を喰ふ其牝なるもの一産大抵六子を生む其
腹に袋ありて伸ふべく縮むべし恒にその子な
る者をその袋中にいれ乳せる時のみこれを出す
牡なる者もまた腹に袋ありてその牡をゐすけて
その子を袋中にいれて行走すといふまた亜
弗利加洲に一種の獣あり「セミヒユルパ」と名く其

形狼に異なれども其牡なる者肉嚢ありてその
胸に懸る恒に子を其肉にいれて行走すとそ
いふまく此類なり

亜弗利加の大獣の説

亜弗利加洲「バムホク」國の西方「ガッダ」「ヤカ」等
の地に一種大獣を産す名ある「ギアマラ」といふ其
大きさ象に半倍してその頭頸恰も駱駝に似て
背に二ッの大瘤ありて其足甚長く行歩甚高し
頭に七ッの角ありて各長さ二尺餘色黒くして
その状牛角に類を性悍なりといへども人或は
これを畜ひ養ひ押しめてよく重きを負ひて遠
きにいたれども行歩甚速ならざれどもこれに飼ふの
食料やゝ駱駝の食料と類して其肉を黒人の
徒以て美味とを稱る者なりといふ

「アソラハ」獣の説

また亜弗利加洲に異獣ありて名けて「アツラハ」
又「シアメリ」といふ此獣恒に人の墳墓をあばき
て其の屍を掘だしてこれを食ふとなり

大蟹の説

亜墨利加洲伯西児国に一種の大蟹が産す名
けて「キユアツヒニユム」といふ其螯が開くときは
其大きさは人の腹を開きあるが如し恒に海中に
穴を穿てこれに居る時としてまゝ陸地を
行きは天着し雷鳴すれば則ち此蟹穴よ
り出ば人これを見れば大に歓呼して衆相聚め
てこれを捕へ以て食料になし其味きさえ
く美なりといふ

水蛇の説 英 水蛇石の説

意大里亜の「カラブリア」の地の水中に一種の蛇
が産には名けて「ボア」といふ其状甚大なる小犢
を見れば則ち飛うこれが廻繞してその乳血を
吸ふ人若これに咬まるれば其腫脹甚大なり昔
し羅馬の「カラウデウス」帝の世に曽て人ありし
て此蛇を撃殺せ其腹中に於て人の全身備
はりる者を得しことありといふ
また「ウエツテマニ」が奇方秘苑にいはく水中に生

ある石の蛇を捕へて其尾を樹木に縛し其頭を下にして掛おくときは其蛇早ければ一時おそければ一二日の間にかならず一の石を吐なりこれを人水を盆子に盛て蛇頭の下に置て其石を盆中に受けて前の水中に漬たること暫時にして而後に石を取出して水腫を病む人の腹上にむすびつけおく時は則よく腫気を除きさるといふ 按するに太平廣記に蛇珠を取るの事を載す頗るこれと相似たり

雞石の説

まつ奇方秘苑にいはく「ハアネル・ステエン」和蘭語「ハアネ」は雞「ステエン」は石なりを生れて四歳を経る雞の肝中に於て時として生ずる所の者にして其大きさ豆の如く質透明なること恰も水晶の如しこれ甚貴むべき物にして戦場に臨むの時などこれを口中に含めば敢て渇することなく且よく敵に勝といふ「リユツデセン」曽て旅行せし時に途中に渇を苦しに人ありて此石を贈る因てこれを舌の上にのせしにこれを試るに即時に渇を止しといふ

先年予が友人曽て雞肝中より此石を得て予に問ふ
予以為これ雞の誤て石を呑みたる者ならんと後に此書を
よみて始て此石なるんと知る當時これを知らずして
其功を試みずしてやみぬること恨むべし惜むべし

西洋雜記巻之五 畢